2014.10.21

博物館 Dictionary No.173

◆あなたに語る・時代を超えて生きる心◆

―― 平成知新館オープン記念展「京へのいざない」にちなんで ――

平成知新館1F-4（染織）「神と仏の染織」に展示されている神様の衣服について勉強してみよう。

神々の再生と神宝の寄進
―阿須賀神社伝来古神宝類―

初もうで、お宮参り、お祭り・・・年中行事や地域の暮らしと深く結び付き、日本人にとってはなじみ深い場所である神社。でも、地元のよく知っている神社のご祭神の名を聞かれると、答えに詰まったりしませんか？身近ではあるけれど、あまり深くは知らない日本の神様の世界。ここでは、神様にささげられた「神宝」と呼ばれる作品群を学びながら、私たちの先祖が、神様をどのように考えてきたかを垣間見てみましょう。

「神宝」というからにはさぞや高価で貴重な品に違いない！と思った方は、ここに挙げた「小葵文様袍」を見て、拍子抜けしてしまったでしょうか。これは、和歌山県にある阿須賀神社という神社の祭神に、明徳元年（1390）頃に奉納された神宝類のうちのひとつです。袍は「うえのきぬ」とも訓読されるように、重ね着をした時に一番上に着用する衣服のこと。実は、神宝は、祭神にゆかりの深い器物（男神であれば剣や弓矢などの武具、女神であれば機織りの道具など）や、祭神が用いる調度品や装束類で構成されています。奉納されたそれらの品々は、神々の住居である神社本殿の中に秘蔵されました。そして、数年おきに新調されることになっていたのです。

実際に使用して傷むわけでもないのに、なぜ新しくするのでしょう？それは、日本の神々は、常に若々しく清浄な存在であることが求められ、古くなった社殿を新築したり、身の回りの品や衣服を新しくしたりすることによって、その生命力がよみがえると信じられていたからです。

写真１　国宝 小葵文様袍（阿須賀神社伝来古神宝のうち）　京都国立博物館蔵

平成二十五年には、二十年ごとと定められている伊勢神宮の式年遷宮が行われ、それとともに各種の神宝が新調されました。ニュースで大々的に報道されていたので、覚えている人もいるのではないでしょうか。このように、新たな神宝は、式年遷宮とともに奉納されることが一般的です。この袍が伝来した阿須賀神社は、世界遺産にも登録された「紀伊山地の霊場と参詣道」に含まれる、熊野速玉大社にゆかりの深いお宮。平安時代以降、熊野詣でと称される熊野地方への巡礼がたいへん盛んになり、熊野速玉大社および阿須賀神社にも、天皇や上皇といった時の権力者が数多く参拝しました。繁栄を極めた一帯でしたが、世情不安定な南北朝時代を迎えると急速にさびれ、三十三年に一度行うことが定められていた式年遷宮やそれにともなう神宝新調が実現できなくなってしまいました。熊野速玉大社に残された文書によれば、莫大な費用がかかるため懸案となっていた遷宮を実現させた中心人物は、金閣寺を建立したことでも名高い、室町幕府三代将軍・足利義満でした。

それでは、義満を筆頭とする時の権力者が奉納したという阿須賀神社の神宝を、一部ですが紹介しましょう。「小葵文様袍」［写真１］のような衣服は、公家男性が着用する「直衣」に等しく、「石帯」［写真２］は、束帯とよばれる公家男子の正装に用いる帯です。ほかにも「冠」や「表袴」など、いずれも男性の衣服が伝えられることから、阿須賀神社の神宝は、祭神であるコトサカオノミコトという男神にあわせて調製されたことが分かります。コトサカオノミコトは、日本神話においてイザナミとともに天地を創成したとされるイザナギが、イザナミとの別離の際に吐いた唾を掃き清めた時に生まれたとされる神。そのため、魔よけや縁切りなどの力を持つと考えられてきました。

写真２　国宝 石帯（阿須賀神社伝来古神宝のうち）
京都国立博物館蔵

神宝の準備にたずさわった人々は、祭神の性格を考慮しながら、衣服や身の回りの品々を用意していったことでしょう。そして準備の際には、それ以前に奉納された神宝を参照しつつ、当時最高の素材や技術を惜しみなくつぎ込んだことでしょう。この時代を生きた公家の衣服は残されていませんが、神様のために特別に作られた最高級品によって、私たちは当時の染織の様相をうかがい知ることができるのです。

常に若々しく、人間のように性別をもち、神話という物語とともに語られる日本の神々。神々の再生の象徴でもある新たな神宝の寄進には、そのあふれる神威にすがろうとする先人たちの深い祈りがこめられているのです。

（工芸室　山川　曉）

印刷・富士印刷社